

幼児体育の授業が保育者志望学生の運動意識へ及ぼす影響

The effect of child physical education on attitudes toward exercise of students majoring in early childhood care and education course

高 徳 希

Nozomi TAKATOKU

キーワード：幼児体育・保育者志望学生・運動意識

1. はじめに

子どもの運動能力が低下傾向にあることは既に周知されている問題であり、これには就学以前の幼児期のライフスタイルが深く関わっている²⁾。近年では、走・跳・投の基本的動作の分析⁵⁾や運動能力の基盤となる調整力を養うための運動プログラムの提案^{1, 4)}といった直接的に幼児へ働きかける改善策の研究も進められ、2007～2009年度に実施された全国規模の幼児を対象とした体力・運動能力調査の結果をふまえて、2012年には文部科学省より「幼児期運動指針」も示された。

運動発達を支えている直接的で主な要因は、運動経験の量と質である¹³⁾。これを確保する方法として、運動の技術的指導や体育的一斉指導などが

挙げられるが、幼児の運動発達に関しては、特別な運動指導を行っている園ほど運動能力は低いことが報告されている⁹⁾。幼児期の運動経験において重要な点は、多様なパターンの動作を経験させ、洗練させることであり、それらを幼児の興味・関心に基づいた自発的な遊びの中で体験させることである。つまり、運動技術のトレーニングでもなく、体育的一斉指導でもない、「遊び」を通した運動経験が重要となる。そして、幼児期の多様な運動遊びを通して「体を動かすことの楽しさ」を体感するという経験が、成人してからの運動能力や身体運動に対する意識へとつながっていくのではないかと考えられる(図1)。

一方で、幼児に運動遊びを体験させる幼稚園や保育所という場において本来の身体運動の意義をふまえた保育が営まれているかどうかという点については、保育者の身体運動に対する意識が保育中の運動遊びの位置づけを左右する^{10, 13)}と指摘されており、保育者自身が運動に対して苦手意識を持っていたり、遊びの経験が少なかったりする場合もみられ¹⁴⁾、必ずしも運動遊びへの取り組みに対して積極的な意識を持つ者ばかりではないというのが現状である。

このような現状をふまえ、保育者養成課程において、「体を動かすことの楽しさ」を体感しながら身体運動の意義を理解し、幼児期の運動経験の量と質を確保できるように保育者志望学生の運動意識を構築することが非常に重要であるといえる。幼児への直接的な働きかけだけでなく、保育

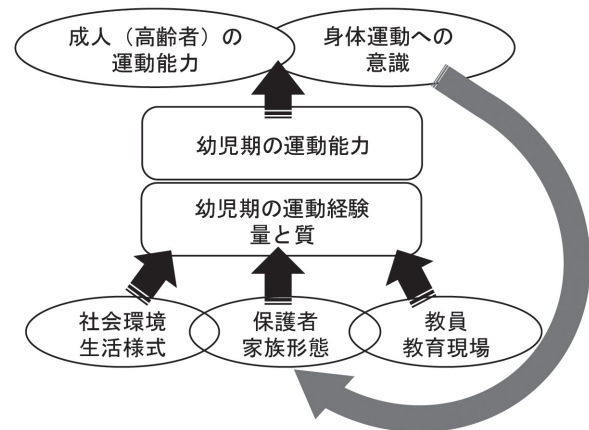


図1. 幼児から成人までの運動能力に影響すると考えられる要因

者側（保育者志望学生を含む）の身体運動への意識改革を促すことにより、より自然な形で保育現場の中に運動遊びが位置づけられるのではないだろうか。そこで、今回は、保育者志望学生を対象とした運動意識の調査を行い、保育者養成課程の必修科目である幼児体育に関する授業「体育Ⅱ」において様々な運動遊びを体験し、それらの体験が保育者志望学生の運動意識へと及ぼす影響について検討した。

2. 調査方法

1) 調査対象者

「体育Ⅱ」における授業前調査については、「体育Ⅱ」の受講生 105 名（有効回答のみ）を対象者とした。また、授業前調査対象者のうちの 1 グループ（有効回答のみ 27 名）については授業後調査の対象者とした。

2) 運動意識に関する調査の質問紙

山下ら¹¹⁾の研究で使用されていた運動意識（運動やスポーツに対する意識）を調査するための質問紙を用いた。この質問紙は 28 項目から成り、回答は「かなりあてはまる（5 点）」、「ややあてはまる（4 点）」、「どちらでもない（3 点）」、「あまりあてはまらない（2 点）」、「まったくあてはまらない（1 点）」の 5 件法で求めた。

3) 手続き

「体育Ⅱ」の第 3 回目の授業内において、上記 2) の質問紙へと回答し（質問紙には、性別、年齢、氏名も記入）、第 3 回～第 8 回（全 15 回のうちの 6 回）において、「道具を使った運動遊び（フープ、棒、縄、新聞紙、マット、跳び箱）」を行った。その後、授業前調査対象者のうちの 1 グループについては、6 回目（跳び箱を使った運動遊び）の授業終了後に上記 2) の質問紙に回答した。

4) 分析

授業前調査については、対象とした保育者志望学生の運動意識の特徴を明らかにするために、全対象者（105 名）の回答データを用いて質問紙項目別に得点の平均値を求め、全体的な傾向を分析した。また、「運動意識」尺度の因子構造を明らかにするために因子分析（主因子分析・プロマックス回転）を行った。授業後調査については、対象とした 1 グループ（27 名）の回答データを用いて質問紙項目別に得点の平均値を求め、授業前調査と比較するために対応のある t 検定を行った。いずれの分析もエクセル統計 2012 を用いた。

3. 結果

1) 保育者志望学生の運動意識について

表 1 に授業前調査対象者（105 名）の各項目の得点を示す（高得点順）。まず、保育者志望学生の運動意識における全体的な傾向をみていくと、上位 5 項目については、「26 運動する時、運動のルールや約束事をきちんと守る」、「3 健康でじょうぶな体をつくり、体力をつけたい」、「7 できない運動でも、あきらめないで練習すればできるようになると思う」、「23 精一杯、全力を尽くして運動する」、「5 運動する時、先生や友達の話聞く」であった。一方で、下位 5 項目については、「22 たいていの運動は、上手にできると思う」、「4 運動について自信を持っているほうである」、「8 ふだん、楽しい動きや変わった動きを思いつく」、「15 あるものになりきって、体の動きで表現したい」、「10 運動能力がすぐれていると思う」であった。

この 28 項目について、全対象者の回答データを用いて、山下ら¹¹⁾の研究を参考として因子分析を行った結果、表 2 に示した 3 因子 13 項目が運動意識に関する項目として抽出された（第 1 因子：

項目番号 10, 22, 4, 13, 14, 16, 2, 第 2 因子: 項目番号 27, 28, 24, 第 3 因子: 項目番号 25, 19, 26)。抽出された項目が先行研究¹¹⁾とほぼ一致していたことから同様の因子名を命名し、「10 運動能力が優れていると思う」や「13 努力さえすれば、たいていの運動は上手にできると思う」などの項目で構成される第 1 因子を「運動自己肯定感」, 「27 はやく走ったり, 長い距離を走ったりできるようになりたい」などの項目で構成される第 2 因子を「運動願望」, 「25 運動している時, 友達がはげましたり, 応援してくれる」などの項目から構成される第 3 因子を「周囲からの応援」とした。これらの 3 因子に関する信頼性を検討するため, 因子ごとに α 係数を算出し, 第 1 因子は $\alpha = 0.9179$, 第 2 因子は $\alpha = 0.8058$, 第 3 因子は $\alpha = 0.7811$, 13 項目全体では $\alpha = 0.8978$ であったことから, いずれも十分な値を示したといえる。

表 1. 授業前調査対象者 (105 名) の各項目の得点 (平均値±標準偏差)

| 項目番号 | 項目内容 | 平均値±標準偏差 |
|------|---------------------------------------|-----------|
| 26 | 私は、運動する時、運動のルールや約束事をきちんと守ります | 4.34±0.60 |
| 3 | 私は、健康でしようぶな体をつくり、体力をつけたいです | 4.33±0.76 |
| 7 | 私は、できない運動でも、あきらめないで練習すればできるようになると思います | 4.12±0.87 |
| 23 | 私は、精一杯、全力を尽くして運動をします | 4.10±0.80 |
| 5 | 私は、運動する時、先生や友達の話を聞きます | 4.07±0.79 |
| 25 | 私が、運動をしている時、友達がはげましたり、応援してくれます | 4.02±0.81 |
| 6 | 私は、運動したあとに、気持ちがすっきりします | 3.98±0.93 |
| 2 | 私は、運動する時、失敗したり、競争に負けたりしても、くじけずにがんばります | 3.97±0.98 |
| 28 | 私は、サッカーやドッジボールなどのボール運動がもっと上手になりたいです | 3.88±1.10 |
| 21 | 私は、いろいろな体の動かし方ができるようになりたいです | 3.75±0.98 |
| 16 | 私は、少し難しい運動でも、努力すればできると思います | 3.73±0.91 |
| 19 | 私が、運動をしている時、先生がはげましたり、応援してくれます | 3.71±0.83 |
| 24 | 私は、体の仕組みや病気についてもっと知りたいです | 3.70±0.82 |
| 20 | 私は、運動する時、みんなより上手にできたり、よい記録を出したいです | 3.67±1.00 |
| 9 | 私は、体育の授業以外でも運動をしたいです | 3.66±1.18 |
| 12 | 私は、器械運動（マット、鉄棒、跳び箱）を練習してもっと上手になりたいです | 3.65±1.07 |
| 27 | 私は、はやく走ったり、長い距離を走ったりできるようになりたいです | 3.65±1.07 |
| 1 | 私には、一緒に運動をしようと誘ってくれる友達があります | 3.57±1.31 |
| 18 | 私は、水泳がもっと上手になりたいです | 3.54±1.20 |
| 13 | 私は、努力さえすれば、たいていの運動は上手にできると思います | 3.47±1.07 |
| 11 | 私は、運動する時、みんなができないような技やプレーをしたいです | 3.33±1.02 |
| 14 | 私は、難しい運動でも進んでやります | 3.32±1.05 |
| 17 | 私は、運動して上手くできた時に、みんなに見てもらいたいです | 3.32±1.06 |
| 22 | 私は、たいていの運動は、上手にできると思います | 3.05±1.03 |
| 4 | 私は、運動について自信を持っているほうです | 3.03±1.16 |
| 8 | 私は、ふだん、楽しい動きや変わった動きを思いつきます | 3.03±0.99 |
| 15 | 私は、あるものになりきって、体の動きで表現したいです | 2.86±0.91 |
| 10 | 私は、運動能力がすぐれていると思います | 2.59±1.05 |

表2. 授業前調査における因子分析の結果

| 項目番号 | 項 目 内 容 | 因子負荷 | | |
|--------------|---------------------------------------|-------|-------|-------|
| | | 1 | 2 | 3 |
| 第1因子：運動自己肯定感 | | | | |
| 10 | 私は、運動能力がすぐれていると思います | 0.96 | 0.00 | -0.11 |
| 22 | 私は、たいていの運動は、上手にできると思います | 0.93 | -0.08 | -0.10 |
| 4 | 私は、運動について自信を持っているほうです | 0.87 | -0.07 | -0.03 |
| 13 | 私は、努力さえすれば、たいていの運動は上手にできると思います | 0.76 | 0.06 | 0.02 |
| 14 | 私は、難しい運動でも進んでやります | 0.56 | 0.29 | 0.15 |
| 16 | 私は、少し難しい運動でも、努力すればできると思います | 0.55 | 0.13 | 0.23 |
| 2 | 私は、運動する時、失敗したり、競争に負けたりしても、くじけずにがんばります | 0.52 | -0.07 | 0.26 |
| 第2因子：運動願望 | | | | |
| 27 | 私は、はやく走ったり、長い距離を走ったりできるようになりたいです | -0.09 | 0.88 | -0.08 |
| 28 | 私は、サッカーやドッチボールなどのボール運動がもっと上手になりたいです | 0.09 | 0.75 | -0.05 |
| 24 | 私は、体の仕組みや病気についてもっと知りたいです | -0.12 | 0.67 | 0.17 |
| 第3因子：周囲からの応援 | | | | |
| 25 | 私が、運動をしている時、友達がはげましたり、応援してくれます | 0.05 | -0.11 | 0.82 |
| 19 | 私が、運動をしている時、先生がはげましたり、応援してくれます | -0.02 | 0.04 | 0.74 |
| 26 | 私は、運動する時、運動のルールや約束事をきちんと守ります | -0.13 | 0.13 | 0.67 |
| 因子間相関 | | 1.00 | 0.49 | 0.46 |
| | | 0.49 | 1.00 | 0.43 |
| | | 0.46 | 0.43 | 1.00 |

2) 授業前後における運動意識の比較

次に、授業前調査対象者のうちの1グループ（27名）を対象として授業後調査を実施した。表3に授業後調査対象者の授業前後における各項目の得点とt検定の結果を示す（授業前調査の高得点順）。

このグループの授業前調査における得点の上位5項目は、「3健康でじょうぶな体をつくり、体力をつけたい」、「26運動する時、運動のルールや約束事を守る」、「7できない運動でも、あきらめないで練習すればできるようになると思う」、「23精一杯、全力を尽くして運動をする」、「6運動したあとに、気持ちがすっきりする」であった。一方で、下位5項目については、「4運動について自信を持っているほうである」、「22たいていの運動は、上手にできると思う」、「8ふだん、楽しい動きや変わった動きをおもいつく」、「15あるものになりきって、体の動きで表現したい」、「10運動能力がすぐれていると思う」であった。

授業前後の得点を比較すると、全体的に授業後の得点が高くなる傾向がみられ、対応のあるt検定の結果、全28項目中の18項目（項目番号1, 5, 8～10, 12～17, 19～21, 25～28）については、授業前より授業後の得点が高かった。特に、「19運動をしているとき、先生がはげましたり、応援してくれる」といった周囲からの応援に関する項目、「16少し難しい運動でも、努力すればできると思う」や「17運動して上手くできた時に、みんなに見てもらいたい」といった運動への努力や前向きな姿勢に関する項目、「12器械運動（マット、鉄棒、跳び箱）を練習してもっと上手になりたい」、「15あるものになりきって、体の動きで表現したい」、「27はやく走ったり、長い距離を走ったりできるようになりたい」といった特定の運動種目に関する項目における得点の変化が顕著であったといえる。

表3. 授業後調査対象者の授業前後における各項目の得点（平均値±標準偏差およびt検定結果）

| 項目番号 | 項目内容 | 平均値±標準偏差 | | t 値 |
|------|---------------------------------------|-------------|------------------|----------|
| | | 授業前 | 授業後 ※ () は順位 | |
| 3 | 私は、健康でじょうぶな体をつくり、体力をつけたいです | 4.44 ± 0.75 | 4.52 ± 0.64 (2) | -0.81 |
| 26 | 私は、運動する時、運動のルールや約束事をきちんと守ります | 4.37 ± 0.63 | 4.63 ± 0.56 (1) | -2.27 * |
| 7 | 私は、できない運動でも、あきらめないで練習すればできるようになると思います | 4.30 ± 0.72 | 4.41 ± 0.75 (12) | -0.83 |
| 23 | 私は、精一杯、全力を尽くして運動をします | 4.30 ± 0.67 | 4.52 ± 0.70 (4) | -1.54 |
| 6 | 私は、運動したあとに、気持ちがあすっきりします | 4.22 ± 0.80 | 4.44 ± 0.80 (9) | -1.54 |
| 25 | 私が、運動をしている時、友達がはげましたり、応援してくれます | 4.22 ± 0.64 | 4.52 ± 0.70 (5) | -2.30 * |
| 2 | 私は、運動する時、失敗したり、競争に負けたりしても、くじけずがんばります | 4.19 ± 0.79 | 4.41 ± 0.84 (11) | -1.65 |
| 28 | 私は、サッカーやドッジボールなどのボール運動がもっと上手になりたいです | 4.07 ± 1.17 | 4.48 ± 0.64 (8) | -2.18 * |
| 5 | 私は、運動する時、先生や友達の話聞きます | 4.04 ± 0.90 | 4.48 ± 0.64 (6) | -2.73 * |
| 12 | 私は、器械運動（マット、鉄棒、跳び箱）を練習してもっと上手になりたいです | 3.96 ± 0.98 | 4.52 ± 0.70 (3) | -3.09 ** |
| 21 | 私は、いろいろな体の動かし方ができるようになりたいです | 3.96 ± 1.06 | 4.37 ± 0.63 (14) | -2.51 * |
| 18 | 私は、水泳がもっと上手になりたいです | 3.93 ± 1.17 | 4.11 ± 1.01 (21) | -0.78 |
| 19 | 私が、運動をしている時、先生がはげましたり、応援してくれます | 3.93 ± 0.96 | 4.44 ± 0.85 (10) | -3.02 ** |
| 9 | 私は、体育の授業以外でも運動をしたいです | 3.89 ± 1.22 | 4.30 ± 0.87 (15) | -2.38 * |
| 20 | 私は、運動する時、みんなより上手にできたり、よい記録を出したいです | 3.89 ± 1.01 | 4.26 ± 0.76 (16) | -2.08 * |
| 16 | 私は、少し難しい運動でも、努力すればできると思います | 3.85 ± 1.10 | 4.48 ± 0.70 (7) | -3.70 ** |
| 13 | 私は、努力さえすれば、たいていの運動は上手にできると思います | 3.81 ± 1.00 | 4.19 ± 0.92 (18) | -2.29 * |
| 24 | 私は、体の仕組みや病気についてもっと知りたいです | 3.81 ± 0.83 | 4.07 ± 0.83 (22) | -1.27 |
| 1 | 私には、一緒に運動をしようと誘ってくれる友達があります | 3.74 ± 1.26 | 4.37 ± 0.84 (13) | -2.85 ** |
| 27 | 私は、はやく走ったり、長い距離を走ったりできるようになりたいです | 3.74 ± 1.10 | 4.26 ± 0.90 (17) | -2.88 ** |
| 14 | 私は、難しい運動でも進んでやります | 3.70 ± 1.03 | 4.11 ± 0.93 (20) | -2.38 * |
| 17 | 私は、運動して上手くできた時に、みんなに見てもらいたいです | 3.70 ± 0.91 | 4.15 ± 0.77 (19) | -3.31 ** |
| 11 | 私は、運動する時、みんなができないような技やプレーをしたいです | 3.59 ± 1.05 | 3.89 ± 0.80 (24) | -1.55 |
| 4 | 私は、運動について自信を持っているほうです | 3.26 ± 1.26 | 3.22 ± 1.05 (28) | 0.20 |
| 22 | 私は、たいていの運動は、上手にできると思います | 3.22 ± 1.12 | 3.56 ± 0.93 (26) | -1.88 |
| 8 | 私は、ふだん、楽しい動きや変わった動きを思いつきます | 3.11 ± 1.05 | 3.93 ± 1.04 (23) | -3.33 ** |
| 15 | 私は、あるものになりきって、体の動きで表現したいです | 3.00 ± 1.11 | 3.74 ± 1.23 (25) | -3.22 ** |
| 10 | 私は、運動能力がすぐれていると思います | 2.89 ± 1.12 | 3.33 ± 0.88 (27) | -2.37 * |

*:p<0.05, **:p<0.01

4. 考察

1) 保育者志望学生の運動意識の構造について

今回の保育者志望学生を対象とした運動意識に関する調査では、小学生を対象とした山下ら¹¹⁾の研究と同様の質問紙を用いたが、この質問紙は、運動有能感測定尺度⁸⁾、運動意欲³⁾や体育に対する意識⁷⁾に関する研究、体育学習における価値観測定尺度⁶⁾から28項目を選択して尺度を構成したものであった。山下ら¹¹⁾の研究と比較すると、大学生であっても小学生と類似した項目が抽出され、年齢に関わらず、運動自己肯定感、運動願望、周囲からの応援といった因子が運動意識の構造となっていたといえる。

運動自己肯定感は、運動に自信があるという身体的有能さ⁸⁾、運動への挑戦や努力、前向きな姿勢などを含む運動や運動能力に対する自己肯定感に関する因子である¹¹⁾。岡沢ら⁸⁾による運動有能感の構造に関する研究では、第1因子である「身体的有能さの認知」は「運動能力が優れていると思う」などの項目から、第2因子である「統制感（自己の努力や練習によって運動をどの程度コントロールできると認知しているか）」は「できない運動でも、あきらめないで練習すればできるようになると思う」などの項目から構成されており、運動有能感が発達によって低下する傾向が明らかとなっている。本調査の第1因子「運動自己肯定感」を構成する項目の得点についても全体的

に低かったことから、先行研究⁸⁾と同様の傾向であったといえる。

運動願望は、本調査においては、陸上運動や球技といった運動種目に対する願望に関する項目で構成されていた。小学生ではこれらの項目の得点は上位5項目に含まれていたが¹¹⁾、本調査で対象とした大学生では上位5項目には含まれなかった。高等学校教育までに様々な運動種目を経験してきた中でも陸上運動や球技といった種目が因子を構成する項目であったことから、速さなどの記録としてわかりやすい種目、特定の技が上手くできるかどうかという基準で判断しやすい種目、勝敗に関わる種目が運動意識に影響していると考えられる。

周囲からの応援は、運動場面での教師や友だちの応援に関する因子である¹¹⁾。岡沢ら⁸⁾の研究においては、「運動有能感」の一つの要因となる「受容感」としており、中学生から高校生の段階で低下する傾向がみられ、その理由として、高校生以上では、スポーツ種目の専門性を重視した学習が多くなること、「身体的有能さの認知」や「統制感」が低下するとともに運動への参加が消極的になり運動場面で受容感を感じるチャンスが少なくなることを挙げていた。また、柳瀬¹²⁾は、保育者を目指す学生にとっては、他者と一体となって体育（運動）の面白さ探求していく「共感志向による意味」が立ち上がる必要があると指摘している。本調査においては、この因子を構成する項目の得点が比較的高い傾向がみられ、これまでの運動場面においては他者に受け入れられているという経験してきた学生が多かったと考えられる。

保育者志望学生を対象とした本調査の結果は、保育者自身が運動に対して苦手意識を持っている¹⁴⁾といった指摘を裏付けるものであり、「運動自己肯定感」、「運動願望」、「周囲からの応援」といった運動意識の構造からみても、柳瀬¹²⁾が指摘するように、高等学校教育までの体育科学習や部活等を含む運動体験との関係性の蓄積が要因となっているといえるだろう。

2) 幼児体育の授業が運動意識に及ぼす影響について

本調査で対象とした保育者志望学生は、幼児体育に関する「体育Ⅱ」の授業の中で、「道具を使った運動遊び」として、フープ、棒、縄、新聞紙、マット、跳び箱といった6種の道具を使った運動遊びを体験した。いずれの授業においても、それぞれの道具の特性を活かしながら学生自身が「体を動かすことの楽しさ」を体感し、「幼児に多様な動きを経験させること」をねらいとした「運動遊び」を経験する内容となるようにデザインした。このような授業前後の調査結果を比較していく。

まず、対象としたグループの授業前調査の結果は、全対象者の調査結果と類似しており、自分自身の健康や体力への関心、運動場面での規律遵守の重視、運動への向上心はあるが、運動有能感は低く、表現運動に対して苦手意識を持っていたといえる。その後、「道具を使った運動遊び」を体験した結果、上位5項目と下位5項目の内容には顕著な変化がみられなかったものの、全体的に得点が高くなる傾向がみられたことから、授業での「運動遊び」の体験が運動意識に対して何らかの影響を及ぼしていたと考えられる。

特に、授業後の得点が顕著に高くなっていた項目は、周囲からの応援に関する項目、運動への努力や前向きな姿勢に関する項目、特定の運動種目に関する項目であった。周囲からの応援に関する項目については、どの道具を使った運動遊びであっても、「一人で」から「二人で」の運動遊び、さらに「集団で」の運動遊びへと展開したこともあり、以前よりも他者との関わりを意識しながら運動遊びに取り組むことで、他者から受け入れられているという受容感や他者と関わる上でルールや約束事を守ることの必要性を体感したのではないだろうか。柳瀬¹²⁾は、保育者を目指す学生として、他者と共に夢中になり、他者と一体となって体育（運動）のおもしろさを探求していく「共感志向による意味」が立ち上がる必要があると述べており、この項目でみられた授業後の変化は「共感志向による意味」が高まったことを示している可能性も考えられる。

さらに、運動への努力や前向きな姿勢、特定の運動種目に関する項目は、授業前調査における得点が比較的良かった項目であるが、授業中に体験したそれぞれの運動遊びは比較的容易ではあったものの、「多様な動きの経験」を重視して様々な動きを「運動遊び」として体験したことによって、運動への取り組み方に対する意識が変化し、やや苦手意識が強かった器械運動や表現運動への意欲も高まったと考えられる。また、これらの項目内容は自己の努力や練習によって運動をどの程度コントロールできると認知しているかという統制感と関連していることから、運動肯定感の中でも特に統制感が高まったことを示しているのではないだろうか。このような調査結果から、保育者志望学生自身が「体を動かすことの楽しさ」を体感し、「幼児に多様な動きを経験させること」をねらいとした「運動遊び」を経験することによって、運動場面における受容感や統制感が高まり、運動意識の変容へとつながる可能性が示唆された。

5. 今後の課題

今回の保育者志望学生を対象とした運動意識の調査においては、第1因子「運動自己肯定感」、第2因子「運動願望」、第3因子「周囲からの応援」といった運動意識の構造が明らかとなり、特に第1因子「運動自己肯定感」に関する項目の得点が低かったことから、保育者自身が運動に対して苦手意識を持っている¹⁴⁾、高等学校教育までの体育科学習や部活等を含む運動体験との関係性の蓄積が要因となっている¹²⁾という先行研究の指摘を裏付ける結果であったといえる。しかしながら、幼児体育に関する「体育Ⅱ」の授業において様々な道具を使った運動遊びを体験したことにより、他者から受け入れられているという受容感や自己の努力や練習によって運動をどの程度コントロールできると認知しているかといった統制感が高まったと考えられ、「幼児に多様な動きを経験させること」をねらいとした「運動遊び」の経験が運動意識に対して影響を及ぼしていたといえる。

今回の調査結果をふまえ、まずは保育者志望学生の現状の運動意識を把握すること、その結果をもとに「体を動かすことの楽しさ」の体感から身体運動の意義の理解へとつながる授業をデザインすることが重要であると考えられる。また、先行研究¹²⁾においては、体育（運動）のおもしろさに触れさせ、他者と共同的に取り組んで、「共感的志向による意味」を生起させる授業デザインの必要性が示されていることから、この点も含めて学習内容の明確化に努めるべきであろう。これらのことを今後の課題とし、幼児期の運動経験の量と質を確保することができる保育者の養成を目指して、幼児体育の授業を通じて保育者志望学生の運動意識の構築に取り組んでいきたい。

【参考文献】

- 1) 蒲真理子・佐野新一・宮口和義・鶴沢典子：幼児期におけるアジリティーラダーを使用した遊びの検討。北陸大学紀要，27：13-23，2005.
- 2) 春日晃章：幼児期における体力差の縦断的推移：3年間の追跡データに基づいて。発育発達研究，41：17-27，2009.
- 3) 松平宗之・高井和夫：子どもの運動意欲を支える心理社会的要因。文教大学教育学部紀要，44：129-142，2010.
- 4) 宮口和義・出村慎一・蒲真理子：幼児におけるラダー運動の成熟度と運動能力の関係。発育発達研究，43：1-10，2009.
- 5) 中村和彦・武長理栄・川路昌寛・川添公仁・篠原俊明・山本敏之・山縣然太郎・宮丸凱史：観察的評価法による幼児の基本的動作様式の発達。発育発達研究，51：1-18，2011.
- 6) 岡雅洋：体育学習における自己評価に関する研究：セルフエスティームとの関連からの検討。

鳴門教育大学修士論文, 1997.

- 7) 岡野昇・山本俊彦：現代の子どもと教師の体育に対する意識調査. 三重大学教育学部紀要教育科学, 54 : 33-43, 2003.
- 8) 岡沢祥訓・北真佐美・諏訪祐一郎：運動有能感の構造とその発達及び性差に関する研究. スポーツ教育学研究, 16 (2) : 145-155, 1996.
- 9) 杉原隆・吉田伊津美・森司朗・筒井清次郎・鈴木康弘・中本浩揮・近藤充夫：幼児の運動能力と運動指導ならびに性格との関係. 体育の科学, 60 (5) : 341-347, 2010.
- 10) 田中沙織：幼児の身体活動に対する保育者の意識に関する研究. 広島大学大学院教育研究科紀要, 59 : 161-166, 2010.
- 11) 山下玲香・都築繁幸・石川恭：子どもの運動意識とそれに及ぼす男女差及び学年差の影響. 発育発達研究, 71 : 1-8, 2016.
- 12) 柳瀬慶子：保育者養成課程における学生の体育観構築に向けた基礎的研究－体育（運動）に対する意識調査を通して－. 高田短期大学紀要, 33 : 49-57, 2014.
- 13) 吉田伊津美・杉原隆・森司朗：幼稚園における健康・体力づくりの意識と運動指導の実態. 東京学芸大学紀要総合教育科学系, 58 : 75-80, 2007.
- 14) 吉田伊津美・岩崎洋子：幼稚園における運動指導の実態と教員の運動指導に対する意識－国公立幼稚園と私立幼稚園との比較－. 東京学芸大学紀要総合教育科学系, 63 : 107-113, 2012.